

あらくさ句会・令和元年十二月例会 選評

【日時】令和元年十二月二十八日（土）

午後三時から

【場所】居酒屋「もりや」

【出席者】眸子 温智、鳴尾、所山【投句者】眸子、温智、鳴尾、所山、三省、万里、りな、泰山、

軽博、開九、凡生、至茶、浪知、白塵、耕田、英堂、
一笑、曲枝、素乱、伸行、端石、陸奥海、丁夫

（二十三名）

【兼題】「餅」

【投句】四句投句 【選句】七句選

《あらくさ選評》 稲田眸子

ふるさとの山河詰まりし餅とどく

三省

どんな人にも、生まれ育ったふるさとの懐かしい風景が心の中にあるはず。それはふるさとの山や川であったり、父や母であったり、時間も忘れて遊びほうけた友達であったりする。

掲句は、そのふるさとを離れ、都会で長く過ごしてきた作者の感慨。お正月が近くなると、いつも送られてくる、ふるさとのお餅を撫でながら、ふるさとの数々の思い出を懐かしんでいるのである。「山河詰まりし」とは言い得て妙。

小春日和孫がよちよち吾はよたよた 伸行

晩秋から冬に移行するこの時期には、まるで春のように穏やかな陽気が続く日がある。これを小春日和という。これから長く寒い冬が近づくと少し前に、春のようなポカポカとした陽気は心が和むもの。

そんな日和に誘われ、お孫さんを抱いて散歩に出かけた作者。あまりの天気よさに、抱いてきたお孫さんを芝生の上に下し、あやしている景色であろうか。「孫がよちよち」「吾はよたよた」と軽妙に、しかもリフレイン的に表現してきたことで、臨場感と弾むような心持が伝わってくる。

北斎の老いても描く雪の富士 浪知

『富嶽三十六景』のあの大波の絵で、世界的に有名な浮世絵師、葛飾北斎。大波の描写をマスターするまでに、三十年近くかかったというから凄い。特に老人になってからの作品は圧倒される。

例えば、「甲州石班沢」は、北斎が七十歳〜七十四歳頃の作品。

藍摺絵（藍色の濃淡のみで仕上げた画）の傑作。岩と狼師の持つている網で富士山と同じ三角形を描いている構図はユニーク。いろんな表情の富士山を描いた『富嶽三十六景』のひとつである。プルシヤンブルーと呼ばれる色がなんとも美しい。当時、海外の芸術家たちを驚愕させたこの色使いは「青の革命」とも呼ばれているようだ。

北斎の描いた傑作を前にして思わず呟いた言葉「老いても描く雪の富士」が十七文字の詩になった。

きりたんぼ美人談義は盛り上がる 素乱

日本各地に様々な美人がいる。例えば、秋田県の秋田美人の他に、青森県の津軽美人や山形県の庄内美人、新潟県の越後美人、京都府の京都美人、島根県の出雲美人、福岡県の博多美人。

秋田美人はその中でも、日本の三大美人に代表されている。秋田美人の特徴は色白な肌。純日本人というよりはハーフっぽい感じで、ロシアやヨーロッパ人のような顔立ちに特徴があるそうだ。

秋田が発祥の地であり、秋田名物として全国に知られている「きりたんぼ」。そのきりたんぼを入れたきりたんぼ鍋をつつきながら、

酒がすすむにつれ、美人談義は盛り上がるのである。

前の日を思ひだすため日記買ふ 軽博

日誌と日記の違いをご存じであろうか。「誌」と「記」はいずれも「文字や文章を書きつける」という意味であるが、「誌」は、記録することに重きを置くので、他人と情報を共有することを前提とし、事実に基づいて客観的に書くもの。業務日誌、航海日誌、経営日誌、学級日誌がその例。「記」は、自分が書き手、更には読み手であることが前提。つまり個人的で主観的に書いてもよいのである。掲句は、前の日を思い出すために日記を買うというのである。年をとるにつれ、激しくなる物忘れ。嘆かわしいことであるが、呟いているような表現が、その嘆きを軽く、ほほえましく伝えてくれる。

老人の入口にあり冬の菊 曲枝

老人とは、読み下せば「老いた人」を意味する。高齢者、お年寄りといった言い方もあるが、その響きはどことなく切ない。

「老人福祉法」によると、「老人福祉法において、老人、という定義はなく、社会通念上、老人とみとめられるような人を指す」と解釈されている。肉体的に老いたからだけではなく、精神的にも老いてしまった人を老人というのではなからうか。

先人は、老人について、数々の名言を残してくれている。

『二十歳であろうが八十歳であろうが、学ぶことをやめた者は老人である。学び続ける者はいつまでも若い。人生で一番大切なことは、若い精神を持ち続けることだ』ヘンリー・フォード（自動車会社フォード・モーターの創設者）

『未完成の自覚を持って、絶えず努力してゆくとところに青春がある。たとえ若くても、自己満足におちいつているなら、その人は老人に等しい』亀井勝一郎（昭和期の文芸評論家）

すつと茎をのぼし、凜とした花を咲かせている冬菊の様は、齢を重ねてこそ、深く味わえるもの。作者はまだまだ老人ではない、齢を重ね、思慮深くなったただけだ、そう思うのである。

石段のじゃんけんぼんや花八手 鳴尾

古くから日本人に親しまれてきた八手。子供の頃は八手の葉っぱを手を持ち、天狗になった気分、神社の境内を走り回ったものである。玄関先に植えられることが多いのは、八手もつ魔除けの力によって、厄を家に入れないという意味があるそう。

その八手は、晩秋から初冬にかけて、二ヶ月間ほど花を付ける。花茎を花火のように八方に広げ、毬状に乳白色の花を咲かせるその様は、地味で美しいとはいえないが私達の心を優しくしてくれる。

掲句は、神社の境内の石段でじゃんけんぼんをしながら遊んでいる子供達の姿を詠んだ。下五に「花八手」を配したのは作者の優しい心の表れであろう。

◇この一句◇ 中川英堂

出口無き思ひ枯野に立ち尽くす 眸子

芭蕉の枯野を彷彿させるような句ではあるが、「出口無き思ひ」と入っていると、流石先生独特の切り込みである。

そしてその場に立ち尽くしたその人は、如何にその場を抜け出たのだらうか？

我が北陸人は雪の原野でこのような場面に遭遇するが、後で振り返ると大変な状態を良く抜けきって生きてきたものだと思うことも多いのである。

これからが冬の本番である。未だ初雪が降らないという、良い意味での異常状態が続いているが、心を引き締めて前に進んで行きた

いと思う。

◇あの一句◇ 高山浪知

前の日を思ひだすため日記買ふ 軽博

日記は、昨年あるいは一昨年の今頃どんなことをしていたかなど、かなり前のことで忘れてしまった事柄を思い出すために記録として用いるのが通常である。しかしながら、人は歳を取るにつれて物忘れが早くなる。昨日のことで無くても、ついさっきのことでも何をしようとしていたのか忘れてしまうことがある。昨日のことでも忘れることは避けられないので、思い出す手段として日記を活用しようとしたこの句の作者の気持ちに強く共鳴したので、取り上げました。

忘れることは避けられないため思い出す手段を考えましょう。また、「朝何を食べたかなど覚えていなくてよい。食べたことさえ覚えていればよい。」と言った最低限のことは覚えるようにしましょう。

◇さらにもう一句◇ 田所耕田

夜行便聖歌の譜読み繰り返す 白塵

外は闇夜。薄明かりの揺れる車中。耳にはゴーという風を切る音。くつろぎ寝転がりながら、ひとり集中し、聖歌の譜面を繰り返し口ずさむ。日常の何気ない生活の中で、神を意識し、神と対話している姿が目に見えぬ。

慌ただしい世の中であって、神との対話により安息が得られている姿が羨ましく思える一句である。

